

青年団×パスカル・ランベール(フランス) 『KOTATSU』第3回報告書〈成果発表〉・ 第4回報告書〈振り返り〉

横堀応彦

青年団とパスカル・ランベールによる国際交流プロジェクト2021『KOTATSU』の最終クリエイションが8月25日から9月8日まで江原河畔劇場にて行われた。この作品は当初9月9日から12日にかけて豊岡演劇祭で初演される予定だったが¹、7月後半にこまばアゴラ劇場にて行われた第1次稽古が終わった後、8月20日から9月12日まで兵庫県内に緊急事態宣言が発出されたことを踏まえて8月18日付で演劇祭の中止が発表された²。演劇祭は中止されたものの、『KOTATSU』のクリエイションは予定通り行われることになり、予定されていた5回の公演は、ほぼ無観客の形で実施された³。報告者は8月下旬から9月上旬にかけて2回江原入りし、8月26日と27日の稽古を見学した後、9月8日の成果発表ならびに9日の初日を観劇した。今回の第3回・第4回報告書では、8月下旬に見学したクリエイションの様態を報告した後、9月上旬に観劇した成果発表の内容についてレポートし、立ち上げ時から公演までを振り返った総評を記す。また第3回分として翻訳者の平野暁人に行ったインタビューを、第4回分として初演を終えたばかりのパスカル・ランベールに行ったインタビュー(第1回報告書に続き2度目)を収録する⁴。

クリエイションについて

江原河畔劇場での稽古にあたっては、8月19日から22日までスタッフが劇場の仕込みを行い、本番通りの舞台装置と照明、音響が組み上がった状態で行われた。パスカルは8月24日の夜に来日したが、日本政府による2週間の隔離措置に伴い、成果発表の前日まで出演者も宿泊するビジネスホテルの一室からリモートで稽古を行うことになった。第1次稽古と同様、カメラも全景を見られるものと役者に寄ったものの2種類が用意されていた。

パスカルは毎日稽古の始まりに俳優の名前を一人ずつ呼んで挨拶した後、それぞれのシーンを細かく演出していった。共同演出の平田オリザは当初の予定よりも長い時間劇場に滞在し、多くの俳優が出演する場面では動きを付ける役割を担った。その場で平田が提案した動きやセリフは、すぐさま俳優たちによって試され、パスカルもその提案を受け入れていた。平田はまた、劇中のところどころで短いセリフを付け加えていった。例えば第18場に女性3人が仕舞を始める場面では、3人が仕舞の準備をしている間の短い時間に、他の役者たちによる「仕舞?」「日本の踊りでしょ」「あー、獅子舞かと思った」「うるさい」という短いやりとりを挿入することで、それまで空白



江原河畔劇場での稽古の様子

だった時間がリアルな時間へと変化していた。

リハーサルを重ねると作品全体の長さが2時間を超えたものになることがわかり、稽古中パスカルは「トリ」という日本語を用いて、シーンとシーンの間は鳥のように速く動くことで間延びさせないように演出していた様子が印象的だった。報告者が見学したのは稽古の前半部分だったが、その中でもパスカルは、「初日まで通しを重ねる中で色々なことが見つかる」と語っており、クリエイションの終盤では連日通し稽古が行われたようだ。



稽古には平田オリザも参加した

作品について

『KOTATSU』は日本のとある一家の広間を舞台にした1月1日の物語である。この家の主人は東京建設株式会社の社長・宏であり、早朝を思わせる暗闇の中、宏が広間に入ってくる場面から作品は始まる。なお、宏を演じるのは太田宏であり、宏の妻・史麻を演じるのは知念史麻であるように、今作において登場人物の役名は実際に出演する俳優の名前と同一である。

作品は2時間15分ほどの長さだが、その中盤には出演者一同でおせちを食べながら過ごす長い場面(第18場)があり、その場面を挟んで大きく3つの部分に分けることができる。前半は比較的早いペースで場面が転換していき、普段は家族が落ち着いて過ごすお正月の裏側で、この一家が経営している東京建設株式会社に大きな問題が起きていることが明らかにされていく。宏の妹で現在ニューヨークに赴任している公美と、その妹で人事部部長の友里の二人の間には緊張関係が感じられ、第18場の終盤、おせちを食べ終わった後二人きりになった場面での言い合いでその緊張は頂点に達する。宏の娘・愛のベビーシッターを務めていたカミラはウズベキスタン出身で、また史麻の親友である瑞季は在日など、多様な役柄が導入されることで、明示的ではないものの、コロナ後の世界における様々な社会問題が浮かび上がっている。宏は冒頭から終盤までほぼ無口だが、最終場(第21場)に兄の健司が初めて登場すると、兄に対しては本心を語り始め、この先の物語の予感を残したところで幕となる。

濱崎賢二による舞台美術は日本の大きな家の広間をイメージさせるが、柱や障子の位置などは実際の日本家屋とは違った作りになっており、どこか独特な雰囲気がある。照明もパスカル作品でよく使われる蛍光灯の明かりにより、ところどころにフランス的な美的感覚が感じられる。多くの人が入りする場所を舞台とすることは平田オリザの作品とも共通しているが、場面と場面の間は暗転により断絶されるなど、作品の中を流れる速度感には違いが見られる。国際共同制作においてはプロジェクトごとに俳優を集め一時的なカンパニーで取り組むことが多く見られるが、本作に出演する俳優は全員青年団の劇団員であり、そのカンパニーとしてのチーム力が一糸乱れぬ劇的緊張を全編にわたって構成していた。